



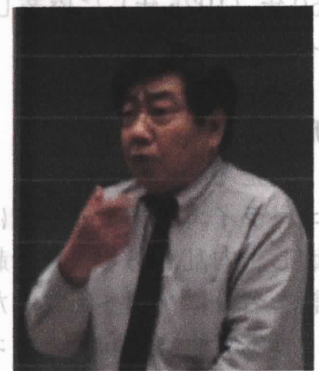
第 47 回（平成 22 年 3 月 10 日）定例会の講演要旨

「地域の古建築」

「北海道開拓期のくらし」～開拓の村の建造物をとらえて～

北海道開拓の村学芸員 氏家 等 氏

学芸員のお立場から、北海道開拓当時の人々の暮らしぶりや、北海道との縁の深い地区との逸話など、広範囲にわたって話されたので主なものをいくつかを紹介致します。



○ 便所の話

その家が所有する畑の規模、家族構成などから大きさが決まってくる。トイレ事情はお国柄や国民性を表しており、トイレに対する考え方もそれぞれ違うようである。

○ 松前藩

生活物質は北前船を利用し本州から調達してきた関係上、本州でのその年の米の出来、不出来に敏感であったようであり、食料に対しては非常に積極的に情報収集をしていたようであった。

過去の大飢饉発生時には、南に移動するのではなく、越冬食を求めて北に移り住んだという事実もあるらしい。食料備蓄に関し特に意識が高いようであった。

「備米蔵」（食料庫）は 1830 年頃には全道に設置されるようになっていた。

○ 昆布屋

北陸・大阪・沖縄が三大地区となっていた。（道内では南茅部産のものが基準となっていた）

北陸地方では富山の薬売りと一緒に流通し、大阪の堺あたりではとろろ昆布、また沖縄では南国との貿易用として流通が盛んであった。

○ にしん屋

福島県・旧梁川町のみ存在していた。（福島県伊達市梁川町）

○ 会津藩

蝦夷地との繋がりが以外にも多くあることが分った。福島県北部の郷土料理「イかにんじん」（スルメとニンジン細切りにし、醤油・日本酒・みりんで味付け）があるが、それに昆布と数の子を加えると「松前漬け」になり、松前漬けの原型説ともいわれている。

百人一首も下の句を読んで下の句を取り、紙ではなく板カルタを使用するなど共通する部分が非常に多い。

会津地方山間部では「床箱」という寒い時期その箱の中で寝る習慣があり、稚内での名残があったとの報告がある。おそらく会津藩が稚内の警備に入った時に残っていたものではなだろうか。

※【床箱：箱の中にワラやモミガラを敷きその上に敷布団を敷く、土間生活の寝具】

※【1808 年：幕府からロシア南下に備え宗谷、利尻の警備を任された】

※【1807 年蝦夷地松前藩が梁川藩に国替えになり、その後 1821 年に再度蝦夷地に国替えになった】 [文責：竹内]

次回の予定

次回（5 月 12 日）は、お 2 人の会員発表、佐藤至氏の「軽川の桜づつみ」と一ノ宮博昭氏の「軽川の社交場みどり亭」を予定しております。

【お願い】

当日は、手稲鉾山研究報告書「手稲鉾山のあらまし」をご持参ください。

軽川光風館事件(1)

光風館

国道5号富丘川あたりから南へ1キロほど登ると、現在の札樽自動車道の山側に光風館という温泉旅館があった。この温泉は、明治26年(1893年)11月3日に小樽の東幸三郎が開業したもので、当時は竜宮城にたとえられるほど豪華な温泉旅館であった。

大正11年(1922年)12月に海賊の江運連力一郎(えづれりきいちろう)が軽川駅で逮捕されたときに、直前に宿泊していたのが光風館ということでも知られるようになった。

ただ、昭和15年(1940年)頃には経営困難となって閉鎖された。

その後、昭和30年(1955年)に小寺アキによって、新しく手稲温泉北家として復活したが、昭和50年(1975年)に廃業した。建物はしばらく残っていたが、これも平成6年(1994年)に火災にあって失われた。

尼港事件

大正9年(1920年)、尼港事件が発生した。尼港事件とはシベリヤのアムール川河口の炭鉱の町、ニコライエフスクの炭鉱に日本から炭鉱夫500人位が、労働に向かっていた。丁度、帝政ロシアが崩壊し、内乱があちこちで起こり政情不安となっていた時代であった。ヨーロッパの各国も自国民の保護を名目にソ連へ出兵した。

日本も他国と同じくニコライエフスクの炭鉱労働者を保護する目的でシベリヤへ1000名ほどの軍隊が出兵し、ニコライエフスクを占領していたのである。

その後、どうにか世情安定し、ヨーロッパの各国が撤兵したのであるが、日本は他に思惑があったのか、なかなか撤兵をしなかったのである。

大正9年2月、バルチザンに攻められた同守備隊は戦況不利と見て、協定を結び、市を撤退すると協約したのであるが、その後、応援部隊が出発したとの無線連絡の報を得ると、隊長、領事が功を焦り、協定を破って奇襲攻撃に出たのである。

ところが強力なバルチザンの反撃にあい、前線部隊は隊長、領事を含めて全滅し留守部隊少数と居留民122名が捕虜となった。

5月に日本軍が大挙来襲するとの報をバルチザンが知り同市を撤退することになったが、その時、市街を全く焼き払い、日本人捕虜を皆殺しにしたのであった。救出部隊が尼港を占領したとき全市は、満目荒涼とした焼け野が原と化し惨憺たる光景を呈していたという。

当時の軍歌に

満目百里 雪白く
こうぼう山河 風荒れて
枯れ木にやどる 鳥もなく
ただ、上弦の 月青し
光に濡れて しらじらと
打ち伏す屍 我が友よ
握れる銃(つつ)に 君はなお
国を守るの 心かよ

(続く)

という歌が存在し、唄われていた。

日本軍は、せっかく救援に向かったが、ただの1人も救出できず、恨みを飲んで虚殺された死体を見出すのみであった。これを尼港事件と言う。

バルチザンとはシベリヤ地区の今で言うゲリラである。しかし、その獐猛振り訓練された強さは日本人を震え上がらせた。

(資料提供：立花頭次会員)

(以下、次号へ「北海の海賊」「軽川光風館」「岩田総一郎警部」)